

# 座談会：我らにとっての「土を考える会」 (後編)

土地の名義は自分のものでも、それは預かりものだと思え！

「北海道土を考える会」(小野寺俊幸会長、事務局=〒071-05・北海道空知郡上富良野町・スガノ農機上富良野営業所内☎0167-45-3151)は、昭和53年6月に、北海道の有力農業経営者27名が「土と経営」について語り合おうという小さな集まりから始り、今年で創立19年を迎える。現在の会員は北海道のトップ農家と呼ぶにふさわしい農業経営者と協賛企業(40社)など830名の組織に成長し、全道・4支部に分かれ活動している。北海道という地域性はあるにせよ農家自身で運営する組織としては最も優れた研究団体の一つだといって間違いないだろう。同会では毎年7月に北海道上富良野町のホワイト農場を中心会場にして講演会と同志交歓会、および協賛農機メーカーの機械展示実演会「北海道農業機械フェア in Kamifurano」をはじめ様々な催しを開催している。同展示会には全道だけでなく府県からも北海道ならではの畑作機械を中心と

した機械類の実演の見られる展示会として多数の参観者を集めている。新しい機械情報の収集とともに地域を超えた経営者との出会い、その経営と技術とを学び、勇気を確認し合う同志交歓会が会員の最大のイベントである。そこで本誌では、創立19年目を迎えた同会の創立当時の会員と現会長の小野寺氏を加えて北海道経営者たちに「北海道土を考える会」を通して学んだこと、後を引き継ぐ若手メンバーへの期待を語っていただいた。そこで話は、たんに同会の若いメンバーたちへの伝言ということだけでなく、全国の農業経営者たちや農業に関わる全ての農業関係者に勇気を与える話題であるはずだ。また、同会の顧問的役割を果たしてきた村井信仁氏(北海道農業機械工業会専務理事)に加わっていたとき、司会は長く事務局に携わってきた「土の館」館長である穠吉忠彦氏にお願いした。(平成8年6月6日・札幌市)

昭和5年常呂町生まれ。同地で約10haまでの規模拡大をはかったが、その後の拡大が見込めず昭和43年離農を決意、スガノ農機入社。48年同社常務取締役、51年専務取締役に就任。平成2年、健康上の理由で同社を退社。その後健康を回復し「土の館」建設準備に奔走し、開館と同時に館長に就任後、現在に至る。「土の館」の館長として、農家ばかりではなく都会の住民に対しても、土と農業と食べ物、そして農業者の夢を伝える様々なイベントを企画している。



穠吉忠彦氏  
(土の館)館長・空知郡上富良野町  
西2線北25号「土の館」内

昭和13年栗山町生まれ。大規模小麦作の技術と経営で土を考える会のシンボル的存在である徳太郎氏の長男であり、同会の創立当時からリーダー的存在であった。畑には、人が通れるほどの暗渠をつくるなど独特手法の基盤整備を自らの手で行ない、栽培上の問題もなく150haに小麦を連作している。早くから250馬力のゴムクローラトラクタ・チャレンジャーを導入する等、麦作の機械化においても日本でトップの存在といつてよい。現在、征矢氏と二人の後継者が農場を経営している。



勝部征矢氏  
(農業・夕張郡栗山町字内山)

がいることで己れの自尊心を保っているようなどころがあります。しかし、土を考える会の仲間といふのは、常に「最高」を見ようとしました。「平均」ではなく「最高」と自分を比べてどれだけ自分が劣っているかを謙虚に見つめ確認しな

石川さんが、第1回目の会合で勝部農場の面積やその売上を聞いていたと話されていました。人は誰でも社会の中で自分の位置を気に自分の頭をハタかれるような気がして生きている。しかし、大多数の人々が比較対象にしているのは「平均」と自分との偏差だと思います。自分が平均的地位にいることに安心し、自分より下に誰か

がら、上にそして未来に向かつて歩もうとされる。より優れた人がなしえたことにチャレンジする精神。そして、その仲間同士が驚くほどオープンに教え合い学び合う。自立した個性ある者たちが競争の中でこそ協同性を持ち続けています。こういう人のつながりというものは農村社会の中では極めて稀なことです。それがなぜできたのか。

また、後継者たちに向けての話題ですが、かつて開拓地に入植した先人たちは今では想像もつかないような苦勞の中で開拓を進めてきたわけですが、彼らには夢があった。夢を見る勇氣があつたのではないかと思います。ここにお集まりの会の創立メンバーからその精神をどう受け継ぐべきなのでしょうか。人間というものは喰えるようになると安心してしまい、危機感を失ってしまう。いつか活力のない状態に陥ってしまうのです。今農業が「厳しい」なんていう人たちが多いわけですが、開拓当初のことを見てみたら天国のような話ではないのか。先代がりっぱな仕事をしていても喰えるようになつた

「土を考える会」は昭和53年6月27日午前11時より翌日の28日にかけて、北海道上富良野のスガノ農機の会議室で始まった。27名で開かれた同会は、農業経営者自身の手作りの経営研究集団として翌年には会員数160名(同志交歓会参加者550名)が集まる会合に発展した。第4回(昭和56年)からは土を考える会主催で協賛農機メーカー各社の機械展示会も上富良野町のホワイト農場において同時開催されるようになった。その後、機械展示会と農業機械操作競技会は第16回(平成元年)からは北海道農業機械工業会と、さらに昨年からは北海道農業機械士協議会も主催団体に参加するようになり、イベントの名称も「北海道農業機械フェア in Kamifurano」と変え現在に続く。

今、後継者がその財産を食い潰してしまってはいることがあります。いか。後継者は自らが先代とは異なる創業者だからこそ後継者たりえるのだともいえます。そうでなければ、後継者とは単なるゴクタブシかよくいって資産管理人であるにすぎなくなってしまうのではないでしょうか。その辺を皆様どうんな風にお考えでしようか。

部さんがいなかつたら現在の自分はなかつた。あの時の90町歩のままで終わりですよ。勝部さんを前にしてこんなこというのなんだけど、あの時勝部さんは「ここにお集まりの方々は、少なくとも粗収入1億円以上の方々だと思います

「人の話を聞く」「人のやっていることを見る」という姿勢を育てる。ことに努力してほしい。これは勝部のおじいちゃんの遺言を代弁するようなこととしていつておきたかった。

業の社会的使命というものがあるのであり、そこが肝心なのだとね。麦作りのことを農業をする僕の使命感ということで考えている。少し話が飛躍するようだけれど

**石川** うまくまとめるな。(笑い)  
勝部 なぜそんなことをいうかと  
いうとね、先程、昆社長が農業と  
いうものがどういうところに軸を  
合わせてやっているのかと話され  
たが、一番弱者なのか、中間なの  
か、それとも最高レベルに合わせ  
るのかと。僕の場合はそういうこ  
とではなくて、今いつた使命感を  
持てる者、それを経済的に果たせ  
る者ということで考えたいわけだ。

後継者たちよ村を飛び出

**石川 武** 私自身は、さつきもいつたけど、今、共同経営で130町歩やつているわけだけども、これは土を考える会に入ったからできしたことだと思います。あの時の勝

**石川 武氏**  
(農業法人) 石川組合理事・網走市  
字嘉多山)

昭和2年網走市生まれ。昭和28年分家独立後8年間自主経営。より一層の規模拡大・所得アップを目指し昭和36年農業法人石川組合を設立。兄一郎・二男式・三男茂の三兄弟でサラリーマンのような収入を目指し共同経営を始め、現在に至る。118haの経営耕地に麦を中心、馬鈴薯、ピート等を栽培する。土を考える会には設立時から参加、同会初代副会長を15年、初代東道支部長を10年間勤める。現在北海道土を考える会役員。

今の若い人は、なまじつか学校を出ていたりするものだからコンピュータなんかいじくつて「自分の経営はこれでよし」などと思っているわけだ。今の人たちはそもそも人の話を聞こうとしない。若い中核会員たちや事務局も大変だと思うけど、若い会員たちに自分の知恵だけでなくもっと人の話を聞くチャンスを作つて欲しいし、

農地の名義は自分でも、それは  
管理責任のある預かり物と考え  
石橋 明 ところで、勝部さんはこ  
の後も麦を続けるのですか。  
勝部 そういうことでもないです  
よ。ただ私は、農業も社会の一員  
である。そして農業はそのなかで  
何をせねばならないかということ  
を考えるべきだと思つてゐる。農

勝部征矢 あんまりそういうこといわれると我が家が困る。一生懸命なのはこっちなのだから。うちの息子になんていつたらよいのか(笑い)。

石川 行く前にきれいにしておいて貰えばいいのさ(笑い)。

一度確認させるためには。道具使  
えば使いっぱなし。それを叱ると  
うるさい親父だと怒りよう。勝部  
さんとこ行こうとね。勝部さんと  
こならそんなこと絶対無いぞつて  
ね。連れていきますからよろしく  
ね。(笑い)。

さ。  
が現在の農業の使命というべきものではないか。そのためには、優良な農地を大した金もかけないで次世代に確保していくには、とりあえず麦だな、と私は考えるわけ

「増産」の時代がつい最近まで続いていたよね。だとしたら農業つて何だ。それは自衛隊と同じで「有事」に備えるということなのではなかと思ふ。稻、麦、野菜、牛にわたっていざとなつたら何でもできる「農地を確保・保全する

てはいけない」なんていう農業の立場や使命は、マッカーサー元帥がアメリカからメリケン粉を緊急援助で持ち込んで日本を食糧危機から救つた時点で終わっていたのだ。しかし、その後でも「増産・曾産」の時代がつい最近まで続いた。

その時代は、食糧増産することが國民に喜ばれることであつたし、農業者は國民を飢餓から救うとう社会や國家に対する使命感を素直に持てた時代だつたのだと思う。しかし今は違う。「いくらコストがかかるっていいから我花者をこ

業の社会的使命といふものがある  
のであり、そこが肝心なのだとね。  
麦作りのことを農業をする僕の使  
命感ということで考えている。

正義の精神

が、私の属する栗山農協だけを例にとってみると、当該地区の田畠の総面積は6万ha弱です。そして農協の正職員は110名、臨時が15名。合計125名がいるわけだ。それで6万haを割ると、一人当たり60haになります。農協職員だけです。我々の經營は世間で一般的ではないにしても我が家では一人で60haを管理しているわけです。しかもその管理水準はこれから5年から10年後にはリタイヤするであろう人々が管理している畠と比べれば

人、女房はもう少し落ちて0・5人。忙しい時期には人も頼んでいるが、その分は請け負いの面積をこなすから相殺して、多く見積もりつて2・5人の労力で150haをこなしている勘定だ。すると一人当たり60haの農地を維持管理していることになる。例えばの話です。

勝部 なぜそんなことをいうかと  
いうとね、先程、昆社長が農業と  
合わさせてやっているのかと話され  
たが、一番弱者なのか、中間なの  
か、それとも最高レベルに合わせ  
るのかと。僕の場合はそういうこ  
とではなくて、今いつた使命感を  
持てる者、それを経済的に果たせ  
る者ということで考えたいわけだ。

## 駒谷 信幸氏

(農事組合法人駒谷農場理事・  
夕張郡長沼町東6線南11)



昭和17年夕張市生まれ。昭和41年弟克明氏と農業法人駒谷農場を設立、順次規模拡大し現在は長沼町に水田52.5ha、畑20ha、牛生産をする。現在構成員は7名。時代を先取りしたスケールの大きい経営感覚は労働時間やコストの低減のみならず、消費者ニーズに合った農畜産物生産を実現している。平成8年3月第25回日本農業賞大賞(個別經營の部)、並びに農林水産大臣賞を受賞。



## 石橋 明氏

(農業・帯広市太平町西8線182)

あらゆる面から見て次世代の人々に喜ばれるものだという自信がある。それだけの農地を維持もしているし作ってもきているという自信はある。そして、次が肝心などころだけど、仮に150haの畑が過ぎないと考えるべきなのです。勝部の名前で登記されていたとしても、勝部は農地の「管理人」に過ぎないと考えるべきなのです。だから、管理者としての能力が無ければ所有を放棄せねばならないのは当たり前なのです。それが使命感ではないか。土地というのは、私のものでも、石川さんや石橋さんのものでも無いのです。未来におけるはね。地球的規模の、人類の財産なさ。また、昆さんも農家でないといつても食糧として子供や孫がその農地の世話をになるわけだから関係なくはないのです。だから多少のコストがかかっても「勘弁してよ」と我々はいつてもよいが、ただ、農民や農業関係者が土地を管理しているということをたてにとつて無駄使いすれば、「米価や麦価を下げるよ」という話も出てこざるを得なくなる。農地は皆の持ち物だ。だから適切な

管理をせねばならない。そんなわけで、自分にとつては、いろんな要素を考えて麦を作るのが農地を管理する手段として一番よいという判断なのだ。だから、将来、麦を作るともいえないし止めるともいえないのです。

指導者たちは農家に向かって、安全な食品だと、野菜を作れとか花を作れとか高付加価値作物だとか色々のことをして「指導」するけど、そんなものは需要があれば自然発生的に作る人が出てくるものなのだ。10年、20年後の農業を考えたら、いかに農地を保全するのかというこの方が大問題のはずですよ。行政などの立場の人は、自分たちが面倒見てやらないと農業が崩壊してしまうような気でいるのかもしれないけど、とんでもない話だ。農業が農業經營者が社会の中で何を果たすべきなのかということを本当の意味で語られるべきだし、そういう經營者の言葉を行政担当者はもっと受け止めて欲しい。これが、僕の麦作りの話なんだ(笑い)。

1、420万ha分の食糧が買える日本は成熟期から後退期に入つてきているわけで、将来にわたつてなんて保障はどこにもないわけでありますよ。あまりにも過ぎる自給率なので。それでいて毎年4万haの農地が住宅や工場に転用されてきているわけです。こんな平和ボケの馬鹿な国はないのかもしれない。ガット・ウルグアイラウンドの縮締以来、低コストだと省力化だとか変なことばかりがいわれているけど、そんな警戒いつてられる状況ではないのですよ。たまたま金があるから呑気にしていてるのだ。また、農業生産コストも今の円高ベースでいつたら高いに決まっている。10年、20年先を考え

は日本經濟新聞に試算が出ていたのですが、日本に輸入している食糧を日本の平均収量で割ると面積が勘定できるわけだけど、それは1、420万haだそうです。日本の食糧輸入を面積換算にするとそくなるわけですね。日本の耕地面積は510万haだから、面積換算にした日本の食糧自給率は実は26%しかないということになる。

勝部 どうなんだろうね、いろんな技術開発があつて、その結果プロの技術・経営レベルがさらに繰り上がりてしまい、また素人が追いついていけなくなる。十年経つとね、人數は減った上に農業就業者の平均年令が僕の上(58歳)にいつちやう。地方の社会生活の中ではとりあえずこの就農人口の激減という問題を兼ね合わせながら考えていかなければならぬと思ふんだけど、そのへんがどうもムズカシイ…。

## 勝部

どうなんだろうね、いろんな技術開発があつて、その結果プロの技術・経営レベルがさらに繰り上がりてしまい、また素人が追いついていけなくなる。十年経つ

たらとんでもないことになる。土作りが簡単にできるなら話は楽なものだけど、そんなものではない。だとしたら、我々が10年先を予測したシフトを考えていかなければならぬ。抜本的な土作り、土壤、土層改良、そして単位面積当たりの収量を上げる努力が今こそ必要なのです。とにかく農耕地がないのだから。

たたらとんでもないことになる。土作りが簡単にできるなら話は楽なものだけど、そんなものではない。だとしたら、我々が10年先を予測したシフトを考えていかなければならぬ。抜本的な土作り、土壤、土層改良、そして単位面積当たりの収量を上げる努力が今こそ必要なのです。とにかく農耕地がないのだから。

## 座談会

### 我らにとつての 「土を考える会」

いつまでも平和ボケの馬鹿な国? そんなノンキな時代じゃないぞ!

村井信仁 次世代に良い土を残すために麦を作るという勝部さんの話、救われるような気がします。日本の食糧自給率が低過ぎるという議論はされるのだが、具体的な方策は何も出でこない。実はこれ

は日本經濟新聞に試算が出ていたのですが、日本に輸入している食糧を日本の平均収量で割ると面積が勘定できるわけだけど、それは1、420万haだそうです。日本の食糧輸入を面積換算にするとそくなるわけですね。日本の耕地面積は510万haだから、面積換算にした日本の食糧自給率は実は26%しかないということになる。

食糧自給率はカロリーベースだとかいろんな言い方があるけど、とにかく現在1、420万ha分の食糧を世界から輸入しているわけですね。自動車や電気製品が世界に売れて、たまたま今、金があるから買えているわけです。だけど経済は30年周期で変動するという。日本は成熟期から後退期に入つてきているわけで、将来にわたつてなんて保障はどこにもないわけでありますよ。あまりにも過ぎる自給率なので。それでいて毎年4万haの農地が住宅や工場に転用されてきているわけです。こんな平和ボケの馬鹿な国はないのかもしれない。ガット・ウルグアイラウンドの縮締以来、低コストだと省力化だとか変なことばかりがいわれているけど、そんな警戒いつてられる状況ではないのですよ。たまたま金があるから呑気にしていてるのだ。また、農業生産コストも今の円高ベースでいつたら高いに決まっている。10年、20年先を考え



覚で行けば次の社長になる人が全部株をもたなければ社長になれないのでないわけじゃない。他の企業でも農業でも有能な人材であれば社長はその家の息子でなくていいわけさ。そういう経営者が農業にも育つて欲しいですね。そして勝部さんがいわれる通り土地はただ国から授かっているだけなんだから誰が授かってもいいわけだ。だから勝部農場の資産は誰か他の経営者に管理させて自分はオーナーでもいいわけだ。

**勝部** だから石川農場にしても石橋農場にしてもそういうスタイルができ上がっている農場は、意識の上でも解決されていてその必要はないわけなのさ。むしろスタイルができ上がりついで農家のためにこそそういう農政上の整理が必要なのだ。

**小野寺** ちゃんと土に金をかけている農場はそういう形で誰でもきちんと継承できるんですよ。ヨーロッパの農場の様に100年も200年も続いている農場があるっていうから行ってみてもさ、先祖のものは日本の府県の農業だけですよ。ではどうしてるのかというと、マイケルの農場は200年、勝部農場は100年続いているけどもその間に経営者は何人も変わつているわけですよ。それじゃあんたもマイケルかといって聞いたらいや

俺はスミスだつていう農場主ばつかりで、じゃあ誰が経営者だと言つたらこの土地を持つているのは○○男爵だとか△△伯爵だとかつていうのがヨーロッパにはたくさんいるとかね。日本も勝部さんがいうようにそれぐらい人間の自由化をさせて、後継者は誰でも好きな人が農業経営に入つてきて、できるシステムをもつともつと考えないとね。

勝部 それが進んでいつたら農民にとつて競争相手ができて辛くなるように考えるかもしれないけど、むしろそれは刺激になつて農業が活性化するメリットの方がデメリットよりずっと大きいと思う。

小野寺 嫁さんの問題なのだけど、嫁さん貰えないのは農業後継者だけかと思つたらそういうじゃないでしょ。40過ぎた独身なんて農業後継者以外にもたくさんいる(笑)。何も農業だけとかいうことを考えなくていいと思うんです。それを何か農業だけが後継者問題や嫁さん問題があるかのようにいう。余計なお世話だというの。

本誌 今日ご参加されているような経営者の方々が語る「正論」は強者の独り善がりの意見として排除され、またそういう人々が生まれ、成長することをわが国の農業界は意識的に排除してきた。体裁の良いオタメごかしで騙されているけど、これまでずっと農業の経営者は農水省や農協であつて、農

家はいわば作男の位置に置かれ続  
けてきたわけです。主体意識を持  
つた農業経営者の立場にたつこと  
を邪魔され続けてきたのではない  
でしょうか。

勝部　いや作男ならカワイイわ。  
奴隸だよ（笑い）。

本誌　その結果、農業に関連する  
業界も、お客さんとしての農家を  
見つめるのではなく、その向こう  
にいるお金の出所である行政や農  
業団体の方を向いて商売をし続け  
ることになった。そこにある利権  
にあずかるために。しかし、そん  
な楽な商売をし続けてきた業界も  
また、なかなか自己改革ができず  
体質を変えられないでいる。補助  
金漬けの農業が弱いように、企業  
も利権を与えられればそれだけ体  
質が弱くなっていくのです。また、  
農業へのオタメゴカシを言うこと  
より他に言葉がなく、もとより自  
らの存在理由を問えないような多  
くの行政や農業団体関係者たちは、  
天からお金が降らなくなってきて  
いる今、右往左往しているわけで  
す。一方、農家も自ら意思決定す  
る経営者の立場に置かれてこなか  
つたために、やはりお上の方を向  
いていて、農産物を買ってくれる  
はないでしょうか。むしろ、実際  
の農産物を買ってくれる消費者の  
お客さんや、川上でなく川下の企

俺を真似るな。好きにやれ  
でも、君は何がしたいのだ

来を心配している人もいるのです。それこそ勝部さんのいう使命感だと、石橋さんのおっしゃる土に貯金するなんて発想がなく、樂して食える場所を求めて、しかも自分だけは生き残りたいという惨めなサバイバルゲームをやつている。なぜ、土を考える会のメンバーが生き残り発展していくのかということを、農業経営者だけでなく農業関係者にも考えていただきたいですね。



昭和26年常呂町生まれ。酪農学園卒業後アメリカで1年間研修。農協4Hクラブ、青年部全道部長を歴任、現在JA常呂理事。平成6年より「土を考える会」3代目会長に就任、現在に至る。「土地は個人のものではない」「競在共栄」をモットーに、地域が生き残れる農業経営を模索する。30haの畑に麦、バレイショ、ビートの他、玉ネギ、コボウなどの野菜を栽培する。自家経営の他、地域内の離農地で友人と共同経営を行なう。その経営に地域農業発展の可能性を模索している。



**小野寺俊幸氏**

昭和27年士別生まれ。東京でアパレル関係の職場で勤務後、昭和51年スガノ農機入社。上富良野営業所を経て、昭和57年より芽室営業所に勤務。この仕事についたことから農家の出身のお嬢さんを希望し、それがかなう。「土を考える会」発足時点から事務局員として作業をし、それを通じて農業を学ぶ。常に農業者の気持ちは理解できる営業マンであることを目指している。

それは何故かというとやはり時代が大きく違うし、これからも変わつて行くだろうから、自分がやるうとする農業をやれよ、お前たちのやりたいやり方を目標を持つてやれど。全く農作業労働をやらない農業経営があつてもよいではないか。僕が長年農業をやっていて疑問に思つた事は、たまたま政府の干渉作物が多かつたからかもしれないけど、自分で自分の作った作物に値段をつけることができないということでした。ですから今後は自分の作ったものを自分で値段をつけて売れるようにならなきやいけないとと思うのです。そのためにはやはり直販店舗なり加工施設なりを充実させていかないと、やみくもに規模を拡大してコストを下げようとしても今の諸外国との経済関係では外国産のものにコストで勝てる戦いはありえない、と僕は思っています。ただ、あくまで自分が何をしたいのか、やろうとする農業が何を目指しているのかということを確認して、何のために農業をやるのかという問い合わせをもつ必要があるのだといつています。息子たちに、もし前たちがやつて経営のバランスを取りなくなるようなことがあれば、いつでも辞めさせて、経営者としての責任を取らせるからなどといつて、同族会社の悪い面を引きずつて潰れる企業も多いと聞きますが農業経営もそれと同じだからです。そ

れと、僕は農業やつて作物を作るのが好きなのか、それとも農地を作ることが好きなのかと聞かれたら、やはり農地を作る方が好きみたいだなあという気がしますね。村井 良い土を作れば黙つて作物は育つものだからね。

「男のロマン、女の不満」ではなく「男の怠慢、女の不満」なのでは?

小野寺 先輩たちの話を聞いていて考えるのですが、北海道にはたくさん農業後継者がいると思いません。いないないと言われる中でも結構いる訳です。けれども、夢とロマンを抱く若い者が少なくなり過ぎちゃったのではないかなど感じがします。今日、皆様のお話を聞いていて、やはり次世代の経営者がどっぷりと自分の親の経営につかり過ぎてしまつて、次に何を目指そつかというのが無いといふことに自分でも危機感を感じているわけです。で、駒谷さんまで自分が何をしたいのか、やろうとする農業が何を目指しているのかということを確認して、何のために農業をやるのかという問い合わせをもつ必要があるのだといつています。息子たちに、もし前たちがやつて経営のバランスを取りなくなるようなことがあれば、いつでも辞めさせて、経営者としての責任を取らせるからなどといつて、同族会社の悪い面を引きずつて潰れる企業も多いと聞きますが農業経営もそれと同じだからです。そ

男の連中は上富良野の丘に集まつて夢を語つてたわけです。これからの農業はそういう部分を併せ持ちながら経営者本人だけでなく家族経営の中で家庭や経営を支えてくれる人を大事にしながら、しかも外部の企業社会と同じように共存しながら競争していくという原理を取り入れなければならないと思います。「競存共榮」が96年の北海道士を考える会のテーマでもあるんです。皆が同じものにどうぶりつかつてしまうのではなくて、競争しながら共に栄えていく。農業も関連企業も「競存共榮」をはかりながら新しい道といいますか、仲間を集めて、今まで20年間土を考える会を引っ張つて来た先輩方と同じように、この会を守るためにどうよりは北海道の農業や自分たちの農業の夢を達成するために頑張ろうと思います。自分たちの夢を限りない可能性として見つめ続ける、そんな同志が見えるものにできればいいなどと考えています。

勝部 今、「男のロマン、女の不満」といったでしょう? それは本当に男のロマンなのかな。例えば学生時代僕等の所へアルバイトに来て、その後何年か勤めてくれて農業になるって人は、ほとんどの人が町のお嬢さんと結婚する。で、その彼らはほとんど実現しそうにない膨大な夢を来る日も来る日も語りかけるのさ、彼女に。それで彼女を射止める。だからそこで

フランスのSIMAショーのよくな農業展示会にしようではないか

司会 どうですか、これからの会への期待等があれば一人ずつ伺つて終わりにしたいと思うのですが。石橋 これからも勉強を今まで以上にやつて頂いて、自分の信念をまとめてあげていつて貰う事が大事かなあと思います。

勝部 難しい質問だねえ、自分の見通しもたたないのに土を考える会はどうだといわれるのは(笑)。

石川 勝部さん、最後の問は例の「土とは何ぞや」さ。あれを思い出せばいいんだよ。

勝部 土はお金もうけになるって話もあるし(笑)。

石川 あの話の時、俺青くなつたぞなー(笑)。白滝の斎藤さんよ。

勝部 土を考える会の中身はある角度から見ればどんどん充実しているともいえるし、大衆性があれば魅力が薄れることも仕方がないという見方もあります。土を考える会はいい事をやつっていても自分達の中だけで終わらせないで幅広い人に何とかしてこんなのがあるんだよという事を分かつてもらえてるようにしてもらいたい。当時農協あたりの小さい店舗には必ず土を考える会の大きなポスターを貼つていた。そんなに派手ではないかもいいから、宣伝をしつかりやってもらいたい。というのは、出品する農機メーカーあたりからは不満も出ているわけですよ。人は不満も出ているわけですよ。人にはばかり過ぎるとか。もちろん農業機械フェアだけが土を考える会ではないのだけれどこれがメインになっていることも事実だからね。

司会 その辺の話も含めて新しい時代に対する取り組みみたいな事はありますか。

小野寺 若い人たちがどんな期待を持ってそれに応えられるかが土を考える会のこれからの中でもあります。北海道の農業機械ショーとして我々がフランスのSIMAのショーを見に行くのと同じようにわくわくするものを持つて上富良野の丘に集まれる、そういう機械ショーをこれから作つて行きたいなと思います。それは農業機械だけに限らず農業を側面から支援してくれるアグリビジネスの方々、こういった雑誌等も通じて支援してくれる達が皆あの丘に来てくれて、そこに集えれば何かわくわくするお話を聞けて、20年前に皆さんのが思つた土を考える

